

嶺岡牧吉宗の白牛・“馬捕り場・石葺の野馬土手”が！

愛宕山（408m）の嶺岡山系に広がる嶺岡牧（鴨川市～南房総市）の跡構を日暮晃一さんに案内してもらいました（2018・2/4）。

八代將軍吉宗がインドから白牛を3頭導入し白牛酪をつくり、それから明治に至って嶺岡畜産（株）が成立。日本の酪農発祥の地として展開、“森永”“明治”乳業もここから発祥しました。この牧は馬を主として1000頭放牧していた幕府直轄の牧でした。日暮さんは開口一番「牧の役割は軍馬の生産と言うよりは農作業への“原動力＝馬の生産”の場です」と力強く主張されました。

西二牧では木戸口跡、野馬土手、採石場の跡、仮囲いを見ました。土で造る小金牧の土手と違って、土手の表面を山から採れる岩石を縦につみあげる形の土手で、山の斜面につくられている状況が見てとれました。山の中なので草木や土砂に埋もれて見えない状況を、私たちが見ることができるよう整備されている日暮さん達の活動に頭が下がる思いでした。



約4時間程歩いたが常に目の前には土手と採石場の跡が・・・野馬土手は確認されている40kmと未確認10kmがあるとのこと。30間ごとに設定されている木戸口の跡は60か所、馬頭観音が500か所、馬捕り場が5か所確認されているとのこと。

牧の中に多くの採石場の跡があり大きくきれいな形で石を切り取り近隣で売却したとのこと。この石を使って、ある程度の大きさの石にして土手の表面を覆うように縦にくんである土手がズート続いています。土手の高さは0.5～1mですが側には堀がほられていました。“広い仮囲い”もありその場で品種の改良がおこなわれたのでは・・・とのこと。吉宗は嶺岡牧を再興するのに東北地方の南部・仙台・三春からそしてハルシャ（ペルシャ）からそれぞれの血筋の馬を導入。それ故馬の焼印も小金や佐倉牧などの様な“牧”ごとではなく“血筋別”に付けられていたとのこと。

西二牧と東上牧との中間に県立の施設“酪農のさと”があります。その牧には白牛が一頭と数頭のヤギ、ホルスタインがゆっくりと草を食べていました。この酪農のさとの牧の姿が嶺岡5牧全域に広がっていた原風景とのこと。白牛が二頭のうち一頭が死亡し一頭になっていたのはいかにもさみしい限り。千葉県は増やす計画もないようなので・・・これはなんとかしなければと思われました。

東上牧の西の端には牧の役所である“八丁陣屋”の跡があり300mの山の上なのに井戸から水がわき出していた跡が・・・。

東上牧の“馬捕り場”を見ました。道から谷に向かって下がっていくと山の斜面を切り取り一面の壁の状況にし、それに沿って斜面を三つに区切る石の土手が。そして馬を送りこむ為の勢子土手が・・・。スギ林の中を日暮さん達が整備してくれているので大きな馬捕り場の全体を見ることができました。

日暮さんは「嶺岡牧は数十年前は牧だったのです。酪農の里の前の様な牧草の山が続いていたのです。山の上からは太平洋と東京湾の海が見える牧だったのです。今、全域を牧として復活させ牛600頭、馬300頭を放牧する広大な牧を復活させたい。車は入れず馬での移動。そこで地元の産業・雇用・文化を再生させたい」と熱く語りました。

嶺岡牧の遺構があまりにもきちんと残っているので、崩されすぎた・壊されようとしている鎌ヶ谷市内の小金牧の現状を見ている私たちにはびっくり。調査・整備をして国の史跡として指定し、きちんと保全・活用していくべきと思われました。